29 立位負荷時の脳 SPECT による脳血流分布の検討 -- 大脳白質病変患者を中心に --

石井勝己，中沢圭治，西巻博，西山正吾，堀池重治，菅信一，石井鋭尚，依田一重，松林隆（北里大・放）
鈴木秀一，阿久津二夫，坂井文彦（北里大・内）

最近，大脳白質病変に関する研究が多くみられるようになったが，これら患者の局所脳循環動態を検討する目的で立位および臥位における ^{123}I - IMP 又は ^{99m}Tc - HM - PAO による SPECT 検査を施行した。検査対象は大脳白質病変患者 11 例，慢性期脳梗塞 5 例，一過性の頭痛など 4 例である。SPECT 検査は臥位と立位の 2 回施行した。大脳白質病変患者の脳血流分布は一過性のめまいなどと異なり，臥位でも前頭葉白質に低下を認めたものがあったが，立位では全例にみられるなど痴呆と関連づけられそうな興味ある結果が得られたので報告する。

30 Crossed cerebellar diaschisisに対するacetazolamide負荷の影響（脳血管拡張能の検討）

寺田一志、古川崇子、五味達也、村上省吾、長基雅司、桑島　章、平松慶博（東邦大学第二放射線科）岩渕　聡、牛久保行男、鮫島寛次、吉井信夫（同第二脳神経外科）

Crossed cerebellar diaschisis(CCD)を示した脳血管障害14例に対し16回のacetazolamide負荷前後脳血流SPECTを施行し、小脳半球の血流の左右差を負荷前後で視覚的に評価した。16回中12回(75%)で負荷により小脳半球の左右差が明らかに減少し、血管拡張能は保たれている症例が多かった。発症よりの期間では1箇月以内で10回中9回(90%)、1箇月以上では6回中3回(50%)で左右差が減少し、経時的に血管拡張能が低下した例も見られ、時期により異なった病態を見ている可能性が示唆された。一方で発症より何年も経た慢性期に負荷により左右差が全く消失する例もあり、CCDは複雑な病態を示すものと考えられた。

31 うつ状態における局所脳血流量について

杉浦孝典，川名明徳，鈴木二郎　（東邦大学精神科）
渡辺　象（東邦大学第２内科）

局所脳血流量（ｒＣＢＦ）は、精神状態により変化することが指摘されてきている。感情障害の患者のｒＣＢＦでは、うつ病相期と寛解期では差が明らかであることが経験上わかってきた。今回われわれは、このうつ状態に注目してｒＣＢＦを測定してみた。うつ状態を呈する疾患として、感情障害のほかに精神分裂病、非定型精神病、抑うつ神経症、ヒステリーなどを検討した。その結果、うつ状態でも疾患によってｒＣＢＦの様相が異なることが判明した。今回の ^{123}Ｉ－ＩＭＰによる研究は、うつ状態によってｒＣＢＦが変化するか、あるいは疾患によって一定のパターンをとるかなどの点を明らかにすることを目的とした。このことによって、ｒＣＢＦが診断ひいては治療の指針となり得るかを考察したい。

32 痴呆性疾患の脳血流ｼﾝﾁｸﾞﾗﾌｨｰによる検討

村瀬　剛，五島幸隆，岩崎和幸，大谷正光（西京都病院画像診断部）梶並稔正，藤本良知，福永隆文，梶並溢弘（西京都病院内科）　山本逸雄（滋賀医大放射線科）

Ｎ－isopropyl-Ｐ－^{123}Ｉ－iodoamphetamine（^{123}Ｉ－ＩＭＰ）及び、^{99m}Ｔｃ－hexamethyl propyleneamine oxime（^{99m}Ｔｃ－ＨＭＰＡＯ）によるＳＰＥＣＴを痴呆性疾患38例、非痴呆性疾患(脳血管障害含む)22例に施行し得られた所見と脳ＣＴ所見を対比検討し更に、痴呆の程度・臨床症状(ＮＭスケール)などとの関係について検討した。脳血流シンチにおける両側前頭葉・頭頂葉の相対的血流低下は痴呆の臨床症状とよく相関し、これはＣＴ所見上の前頭葉の萎縮・前角部前方の低濃度所見と関連していたが、脳血流シンチは痴呆の程度の判定により有効であった。脳血流シンチは痴呆の症状分析・鑑別診断に有用と思われた。

33 BRAIN PERFUSION IN MIGRAINE PATIENTS

Koos (J.)A.K. Blokland, Ernest K.J. Pauwels (Div. of Nuclear Medicine) Joost Haan, Michel D. Ferrari (Dep. of Neurology, University Hospital Leiden, Leiden, The Netherlands)

The selective 5-hydroxytryptamine-like receptor agonist sumatriptan is a highly effective novel drug in the acute treatment of migraine attacks. Its selective pharmacological profile may be helpful in studies of the pathophysiology of migraine.In 13 patients suffering from migraine without aura we studied regional brain blood flow (rCBF) using 500MBq Tc-99m-HMPAO during a migraine attack, after treatment with sumatriptan and after a few days without any migraine related complaints. Cortical (6) and white matter (4) brain regions (ROIs) were drawn on the attack free study and applied to all studies of the patient. After normalization of the count data for decay and region size, rCBF was computed. Overall no significant asymmetries or changes in rCBF were found. Individual analysis of the patients revealed two patterns of rCBF changes during attacks: 4 patients showed an increased rCBF, while 11 patients showed a decrease. Sumatriptan reversed the change of rCBF in the second group.

34 頭部外傷患者における脳血流

砂田一郎，赤野義則，山本　茂（山本第三病院脳神経外科）
白馬　明（大阪市立大学脳神経外科）

受傷２時間以内の急性期15例、慢性期３例の頭部外傷患者に脳血流測定を施行した。測定にはSPECTを用い、核種は主に^{99m}Tc-HMPAOを使用し、6例では^{99m}Tc-HSA-Dを使用した脳血液量の測定も施行した。その結果、急性期15例中の12例に局所的な血流低下の部位を認めたが、全例において後のCTscanにて同部に一致した挫傷像の出現を認めた。また広範な血流低下を呈した３例中の２例では重篤な片麻痺が見られ、１例では死亡した。慢性期の３例では、いずれもCTscanやMRIでは検出しえなかった血流の異常を認めた。なお脳血液量測定では、急性期例においては、受傷部での血液量の増加を、慢性期例では減少を認めた。頭部外傷患者にて脳血流を測定することにより、詳細な脳損傷の状態を把握することができた。

Presented by Medical*Online